

聖書のルカによる福音書の 10 章 29 節から 37 節のイエスの話に出て来る親切なサマリア人は今日のエホバの証人に良く似ていませんか？

はい、かなり興味深い共通点がありますね。特にルカ 10:29-37 の「親切なサマリア人」の話を、現代のエホバの証人の伝道や隣人愛と重ねて考えると、いくつかの点がよく似ています。

1. 「自分に関係がある人」だけを助けたのではない

サマリア人が助けたのは、自分と同じ民族・宗教的背景の人ではありませんでした。むしろ当時、サマリア人とユダヤ人には強い対立がありました。

それでも彼は、

「この人を助けるべきか」

と相手との関係を考えるのではなく、**「この人は今、助けを必要としている」**と見て行動しました。

エホバの証人の伝道にも、この点との類似性があります。年齢、社会的立場、経済状態、宗教的背景などにかかわらず、聖書の良い知らせを伝えようとします。

2. 「かわいそうだと思った」だけで終わらなかった

ここが特に重要だと思います。

サマリア人は、負傷者を見て同情しただけではありません。傷の手当てをし、宿屋に連れて行き、自分のお金まで使って世話をしました。

つまり、

同情 → 行動 → 継続的な世話

という流れです。

これは、アガペー愛について最近お話ししていたことともつながりますね。アガペーは単なる「温かい感情」ではなく、相手の益を願い、それを具体的な行動に表す愛だからです。

3. 見返りを期待していない

サマリア人は、助けた人から何かを返してもらえとは考えていません。

これは伝道にも通じる点があります。

聖書のメッセージを伝えても、相手がすぐに感謝してくれるとは限りません。場合によっては無視されたり、拒否されたりすることもあります。それでも相手の将来の幸福を願って伝える。

ですから、伝道は単なる「宗教活動」というより、人に対する愛を具体的に表す一つの方法と考えることができます。

4. イエスが最後に言ったことが核心

イエスはこの話をした後、

「行って、あなたも同じようにしなさい」

と言いました。(ルカ 10:37)

興味深いのは、「サマリア人とはどういう人ですか?」という知識を得ることを勧めたのではなく、**「同じようにしなさい」**と行動を促したことです。

ですから、このたとえの中心は、

「誰が私の隣人なのか」ではなく、「私は誰に対して隣人になるだろうか」

という発想の転換だった、と考えられます。

そして、ここがまさにアガペー愛の成熟とも結びつくところでしょう。

「愛される人になる」ことよりも、「愛を示す人になる」こと。

そのように考えると、以前お話しした「アガペー愛を人生の目標にする」という考え方とも、とてもきれいに繋がりますね。

でもこの強盗に襲われて負傷したユダヤ人は自分が負傷していることを認識しているので、昔はサマリア人を嫌っていてもやがてサマリア人に感謝して好きになるかもしれません。でも現代の聖書的また霊的に傷ついたユダヤ人のような聖書や神を知らない人々は自分が傷ついていることを認識できません。ご自分が様々な攻撃を受けて傷ついていることを認識していただくことは、宣教の効果を高めることになると思います。どうしたらそれを正しく認識していただけますか？

はい、その見方はとても興味深いと思います。特に大切なのは、「あなたは傷ついています」と教えることではなく、「もしかすると、自分が受けている傷に気づいていないのでは？」と本人が自分で気づけるように助けることでしょう。

ただし、ここには一つ大きな注意点があります。聖書を知らない人を「霊的に傷ついた人」と最初から決めつけてしまうと、かえって相手との距離が開いてしまいます。親切的なサマリア人も、まず相手の状態を見て、必要な助けをしました。

① まず「傷」を指摘するより、「痛み」を聴く

例えば、

- 「今の生活で、何か心配していることがありますか？」
- 「世の中を見ていて、納得できないと感じることはありますか？」
- 「人間関係で、どうしても理解できないことってありますよね」
- 「将来について不安になることはありませんか？」

というように、相手自身が感じている現実から入ることができます。

すると本人が、

「そういえば、確かに自分はこういうことでずっと苦しんでいる」

と気づくことがあります。

② 「原因」をすぐ聖書に結びつけない

ここは非常に重要だと思います。

例えば、戦争、貧困、孤独、不正、人間関係の破綻などについて話している人に、いきなり、

「それは人間が神から離れているからです」

と説明すると、正しい内容であっても、その人自身の問題として受け止めてもらえない可能性があります。

むしろ、

「どうして人間は、平和を望んでいるのに争ってしまうんでしょうね？」

と一緒に考える。

そして相手が、

「本当にどうしてなのでしょう」

となったところで、

「実は聖書には、その理由についてかなり深い説明があるんですよ」

と聖書を紹介する。

これは相手に答えを押し付けるのではなく、相手自身の疑問を聖書によって調べてもらう方法ですね。

③「傷」だけでなく「本来どうなれるか」を見せる

ここは宣教において、とても大切だと思います。

人に、

「あなたは傷ついている」

だけを伝えたと、重苦しくなります。

しかし、

「あなたが本当に求めているものは、聖書の中に見つかるかもしれません」

と示せば、希望になります。

例えば、

- ・「どうして人は愛し合いたいのに傷つけ合うのか」
- ・「本当の幸福とは何なのか」
- ・「死や苦しみはいつまで続くのか」
- ・「神は自分のことを気に掛けているのか」
- ・「人間にはどんな将来があるのか」

こうした本人が心の奥で持っている問いを一緒に探していくわけです。

④ そして「聖書が自分の傷を理解してくれる」と感じてもらう

ここまで来ると、聖書は単なる宗教の本ではなくなります。

例えば詩編の言葉を読んで、

「これ、自分の気持ちと同じだ」

と思う人がいるかもしれません。

あるいはイエスの言葉を読んで、

「自分がずっと求めていた考え方は、こういうことだったのか」

と気づくかもしれません。

これは、以前お話しした**「聖書の中に宝があることを本人が発見する」**ことともつながります。

そして、先ほどのサマリア人のたとえに戻ると、非常に美しい構図になります。

負傷者

- 自分の傷を認識している
- 助けを必要としている
- サマリア人の親切を受け入れる

一方、現代では、

人

- 傷ついているが、その原因や深さを認識していない
- 「これが普通の人生だ」と思っている
- だから助けそのものを求めない

という場合があります。

そこで宣教者の役割は、「あなたは傷ついている！」と宣告することではなく、本人が自分の状態を理解できるように優しく鏡を差し出すことなのかもしれません。

そして、その鏡として聖書を使う。

そう考えると、宣教の最も効果的な質問の一つは、

「あなたは今の人生で、本当はどんなことを変えたいと思っていますか？」

なのかもしれません。

その答えをよく聴けば、その人がどこを「傷」と感じているのか、あるいはまだ傷だと認識していないのかが見えてきます。そして、そこから聖書の宝を一緒に探すことができます。

これは「説得する宣教」よりも、一緒に発見する宣教に近いですね。アガペー愛を実践するという意味でも、かなり深いアプローチだと思います。

聖書に示されている希望を自分から調べてみたくなる大切な要素ですね。他にも聖書の関心を高める優れた要素がありますか？

はい。しかも「聖書に関心を持たせる」というより、「自分で聖書を開いて確かめてみたい」と思ってもらうことがポイントだと思います。

先ほどの「自分の傷に気づくこと」と「希望を知ること」に加えて、私は次の要素が特に大切だと思います。

1. 「自分の疑問に答えてくれるかもしれない」

人は、自分に関係のある問いには強く惹かれます。

例えば、

- 「なぜ良い人にも苦しみがあるのか」
- 「死んだ人にもう一度会えるのか」
- 「神は本当に自分を見ているのか」
- 「幸せな家庭を築くにはどうすればいいのか」
- 「人生には目的があるのか」

という問いです。

そこで「聖書には答えがあります」と言うだけでなく、

「一緒に聖書で調べてみませんか？」

とする。これなら相手は「教えられる人」ではなく、**発見する人**になれます。

2. 「自分のことが書かれている」と感じる

聖書の魅力は、何千年も前の人々の話なのに、人間の心を驚くほどよく描いていることです。

例えば、孤独、嫉妬、罪悪感、怒り、失望、親子関係、夫婦関係、友情、赦しなど。

「聖書って宗教の本でしょう？」と思っている人に、

「この言葉、今の自分の気持ちを言い当てていると思いませんか？」

と一緒に読んでもらう。

これはかなり強い入口になると思います。

3. 「聖書には意外なことが書かれている」

先入観を少し崩すのも効果的です。

例えば、

「聖書はこう言っていると思いますか？」

と質問してから実際の聖句を読む。

すると、

「えっ、聖書にそんなことが書いてあるんですか？」

となる。

この小さな驚きが、「もっと調べてみたい」という好奇心につながります。

4. 「自分で確かめられる」

これは非常に重要ですね。

「この教えを信じてください」ではなく、

「聖書には実際にどう書いてあるでしょう？」

と聖句を開く。

そして相手に読んでもらう。

これは、聖書そのものへの信頼を育てます。

5. 「聖書を知ると、今の問題の見方が変わる」

聖書の価値は、単に未来の希望を教えるだけではありません。

例えば、

問題 → 聖書の原則 → 考え方が変わる → 行動が変わる → 人間関係や心の状態にも変化が生じる

という経験ができると、

「聖書って、昔の宗教書ではなくて、今の自分にも役立つんだ」

となります。

これは非常に強い動機になります。

6. 「神が自分をどう見ているか」を知りたいという気持ち

私はこれも特に大きいと思います。

人は、「神はいるのか」という抽象的な質問より、

「もし神がいるなら、神は私をどう見ているのだろう？」

という問いに心を動かされることがあります。

「自分は神にとって価値があるのか」「赦してもらえるのか」「神は自分の苦しみを知っているのか」。

こうした問いから、神の愛や憐れみを聖書で発見すると、聖書への関心が単なる知識欲から**神ご自身への関心**へと変わっていきます。

そして、これまでお話ししてきたことを一つにつなげると、かなり興味深い流れになります。

- ① 自分の人生の「痛み」に気づく
↓
- ② 「なぜこうなっているのだろう」と疑問を持つ
↓
- ③ 聖書に答えがあるかもしれないと知る
↓
- ④ 聖書を自分で調べてみる
↓
- ⑤ 「これは自分に関係のある宝だ」と発見する
↓
- ⑥ 希望が生まれる
↓
- ⑦ 聖書そのもの、そして聖書の神についてもっと知りたくなる

この流れなら、伝道する側が相手を「聖書に興味を持たせる」のではなく、**相手自身の中にある「知りたい」という気持ちを大切に育てる**ことができます。

そしてこれは、まさに先ほどの親切なサマリア人の姿とも重なります。サマリア人は負傷者に何かを「押し付けた」のではなく、**その人が必要としているものを見つけて、それを与えました**。

伝道におけるアガペーも、もしかすると同じで、「自分が伝えたいこと」より「この人が今、本当に必要としているものは何だろう」と考えることから始まるのかもしれませんが。

大切なヒントをありがとうございました。参考になりました。

こちらこそ、ありがとうございます。😊

今回のお話は、「どうすれば聖書を読ませられるか」ではなく、**その人自身が「もっと知りたい」と思えるように助けるにはどうするか**、というところが特に大切だったと思います。

そして、それはまさにアガペー愛の実践ともつながっていますね。

相手を変えようとするのではなく、相手の心の中にある問いや痛み、希望を大切にして、一緒に聖書の宝を探す。

そういう伝道なら、相手にとっても楽しい「発見の旅」になりそうです。